

# 里村 穰の国語科（第2学年）研究計画

## 1 本研究で目指す子ども

国語科は、螺旋的・反復的に学習することで、資質・能力の定着を図る教科である。また、教科目標では、言葉を手掛かりに豊かに想像する力や論理的に思考する力を養うことも求めている。

この特性に応じ、**登場人物に関する複数の言葉を関係付けて読み、人物像をとらえる子ども**を目指す。「登場人物に関する複数の言葉を関係付けて読む」とは、例えば、「この言葉とこの言葉からは、登場人物の〇〇という気持ちが分かる」などと、登場人物の言動に関する複数の言葉を関係付けて登場人物の心情を想像することを指す。「人物像をとらえる」とは、例えば、「この言葉とこの言葉から〇〇という気持ちが分かるので、登場人物は◇◇な人だ」などと、登場人物の言動に関する複数の言葉を根拠に、想像した心情を理由として、登場人物の人柄を表現することを指す。

これまでも、上述の子どもの姿を目指してきた。しかし、例えば、『大丈夫か、くま』という言葉から心配している気持ちが分かるので、優しいおおかみだなどと、登場人物に関する一つの言葉のみを根拠に人物像をとらえる姿もあった。このような姿は、「複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題がある」という中央教育審議会答申の指摘とつながる。

この原因は、人物像の根拠となる言葉を検討させる際の指導にある。前年度、検討させる際に「選んだ言葉・その言葉を選んだ理由」という観点を提示した。しかし、選択した言葉やその言葉から想像した心情を個々に表出するものの、目指す姿までに至らない子どもの姿があった。登場人物の言動に関する複数の言葉を関係付けさせる指導が足りていなかったのである。

そこで、目指す子どもの更なる具現を図るために、人物像の根拠となる言葉を検討させる際に提示する観点の改善を行う。具体的には、根拠となる言葉を検討させる際に提示する観点を「見付けた言葉・その言葉から分かる気持ち・同じような気持ちが分かる言葉」に換える。これにより、登場人物の心情を視点に共通点をつかみ、登場人物の言動に関する複数の言葉を根拠に、想像した心情を理由として、登場人物の人柄を表現することができるようにする。

## 2 本研究で育成する資質・能力、そのために子どもが働かせる「見方・考え方」

「見方・考え方」		
○文脈に即した登場人物の言動に関する言葉の意味に着目して、登場人物の言動に関する言葉と人物像とを関係付けて考えること（以下、「言葉による見方・考え方」）		
①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○情報の扱い方に関する知識・技能	○叙述を基に登場人物の心情を想像する力	○目的に応じて読もうとする態度

## 3 主張する働き掛け

子どもは、これまでの文学的な文章を教材とする単元において、上掲の資質・能力を発揮して課題解決している。本研究において、これらの資質・能力の定着を図る。

単元導入では、まず、「物語を紹介する」という言語活動とこの言語活動に対応した成果物の形式とを提示し、物語と出合わせる。次に、物語を読み聞かせたり音読させたりした後、登場人物とあらすじとを問うて内容の大体をとらえさせる。そして、「どの登場人物が一番お気に入り（素敵、Good等）だと思ったか。どうしてそう思ったか。どの言葉からそう思ったか」などと問う。子どもは、一番だと思った登場人物と理由、根拠とした言葉を表出する。なお、理由には、この段階でとらえている人物像が表れている（Co）。このような子どもに、次のように働き掛ける。

### 働き掛け1

**根拠となる言葉を複数例示し、感じた疑問とその理由とを問う。**

問いをもたせ、学習課題の設定へとつなげるための働き掛けである。

まず、一番という意見が最も多かった登場人物と理由を伝え、人物像の根拠となる言葉を複数例示する。その際、直接的な表現の言葉と間接的な表現の言葉とを示す。子どもは、自分が根拠とした言葉との相違から、「どうしてその言葉なのだろうか」などと問いをもつ。

次に、感じた疑問とその理由とを問う。これにより、「言葉による見方・考え方」を引き出し、学習課題の設定へとつなげるのである。子どもは、「どうしてその言葉からそのような人物だといえるのか」などと、「言葉による見方・考え方」を働かせ始める。これらの疑問とその理由とをまとめ、「どの言葉から、どのような人物と紹介するか」という学習課題を設定する。

### 働き掛け2

例示した言葉の分類と理由、その言葉を根拠とした理由を問うた後、学習の進め方を問う。

課題解決の見通しをもたせるための働き掛けである。

まず、例示した言葉の分類と理由とを問う。これにより、登場人物の言動に関する言葉が根拠となることを共有させる。次に、直接的な表現の言葉について、根拠とした理由を問う。これにより、言葉を手掛かりに登場人物の心情を考えることを共有させる。その後、学習の進め方を問う。子どもは、「登場人物がした言葉や話した言葉を見つけて、その言葉から登場人物の気持ちを考える」などと、「言葉による見方・考え方」を明確にする。そして、「そのためにもう一度読もう」などと、目的に応じて読もうとする態度（③態度）を発揮して、課題解決の見通しをもつ。

### 働き掛け3

個人で読む場を設定した後、観点を提示して分かったことを伝え合う場を設定する。

課題解決に必要な言葉を収集、整理させるための働き掛けである。

まず、個人で読む場を設定する。これにより、物語の文脈に即して言葉を収集させる。子どもは、選択した言葉を書き出す。また、叙述を基に登場人物の心情を想像する力（②思考力・判断力・表現力）を発揮して登場人物の心情を考え、選択した言葉の側書き足す（ツール活用能力）。

次に、観点（見付けた言葉・その言葉から分かる気持ち・同じような気持ちが分かる言葉）を提示して分かったことを伝え合う場を設定する。これにより、解釈の交流を促し、課題解決に必要な言葉を整理させる。子どもは、「この言葉を見付けた」「この言葉から登場人物のこのような気持ちが分かる」「同じような気持ちは、この言葉からも分かる」などと話し合っていく（協働性）。

### 働き掛け4

課題解決のために必要な言葉を問い、言語活動に応じた表現の場を設定する。

課題解決に必要な言葉を判断して課題解決させるための働き掛けである。

「どのような人物かを紹介するために、お話の中のどの言葉を使うか」などと、課題解決のために必要な言葉を問い、言語活動に応じた表現の場を設定する。子どもは、情報の扱い方に関する知識・技能（①知識・技能）を発揮して、「この言葉とこの言葉から〇〇という気持ちが分かるから、この言葉とこの言葉を使って紹介しよう」などと、人物像の根拠となる複数の言葉が必要だと判断する。そして、登場人物の言動に関する複数の言葉を根拠に、想像した心情を理由として、登場人物の人柄を表現する。

この一連の過程を通して、登場人物に関する複数の言葉に関係付けて読み、人物像をとらえる子ども（C<sub>n</sub>）となる。

### 働き掛け5

ペア発表会、振り返りの場を設定した後、人物像をとらえることができた要因を問う。

発揮した様々な資質・能力の自覚を促すための働き掛けである。

まず、とらえた人物像を伝え合うペア発表会を設定する。これにより、互いに成果を感じさせる。次に、振り返りの場を設定する。これにより、学習過程を辿らせ、感じた成果を価値付ける。

その後、「その人物がどのような人物かをまとめることができたのはどうしてか」などと問う。子どもは、ここまでの自分の学びを振り返り、発揮した様々な資質・能力を自覚する。

## 4 検証

### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したC<sub>n</sub>になったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。
- ④ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を自覚することができたか。

### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、登場人物の人柄を表現しているかを記述により検証する。
- ② 働き掛け1・2を受けて、問い、見通しをもっているかを記述、発言、挙手により検証する。
- ③ 働き掛け2・3・4を受けて、課題解決に必要な言葉を収集、整理、判断しているかを発言、挙手、記述により検証する。
- ④ 働き掛け5を受けて、発揮した様々な資質・能力を自覚しているかを記述により検証する。

## 5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月) 「一番お気に入り」を紹介しよう (教材文「お手紙」) (10時間)
- (2) 附属オースタム研修会 (9月) 「一番素敵」を紹介しよう (教材文「きつねのおきやくさま」) (10時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「一番Good」を紹介しよう (教材文「明日も友だち」) (10時間)